

保護者・地域との連携の工夫

ポイント 初めは、一人の子どもの偶然の発見を、友達や保育者もみんなが興味をもって受け止めたことから、その後の遊びへと展開しています。子どもたちが考えたことが、すぐに実現できる素材や用具が身近にある環境の工夫により、子どもたちの、「科学する心」が揺り動かされて、協同的な遊びに体験が深まっています。

本物に触れる～興味に応える環境～

様々な素材を使ってロケット作りを楽しみ、ペットボトルロケット実験の大失敗から、「ロケットはどうしたら飛ぶか？ちゃんと確かめる」との強い思いになった子どもたち。実際に見たり触れたりすることで、より興味が深められればと願い科学館へ遠足に行った。『知りたい！』『どうなっているの？』と感じた時の不思議さ、驚き、感動は、子どもたちの世界を広げるのだと感じた。本物に触れる大切さを改めて感じた。



(関連事例P.26：つばさ保育園)

あこがれの地域の専門家との関わり

5歳児が、「登り屋根」という遊具を建て替えてくださった木工房の職人さんにあこがれ、木工でオリジナルの遊具を作ることになった。本物に触れて作る中で「より本物らしく作りたい」との思いが強くなり、友達と協働し、自分たちだけの遊具を作るために試行錯誤して作る姿につながった。また、職人さんに子どもたちの様子や制作状況を相談し、アドバイスももらったことによって、子どもたちは、より意欲をもち、根気強く完成するまで取り組んだ。



(関連事例P.18：奈良市立都跡こども園)

小学校の先生との連携の工夫

「ソラマメのへその緒」や「図鑑にのっていないボウフラ」など、子どもたちの疑問に、小学校の理科の先生から、答えてもらう場を作った。事前に、子どもの着眼点の面白さや気づきについての話を共有し、子どもに分かりやすく話してもらうように、など打ち合わせた。子どもの質問に答えてもらう形にすることで、「知りたい」という欲求に知識として答えてもらう場となり、子どもたちは、ますます対象への興味を深めていった。



(関連事例P.14：福島大学附属幼稚園)

保育を共有～ドキュメンテーション～

「何を感じ、学ぼうとしているか」を読み取り、子どもの遊びからの学びを可視化する。見て・感じ、「やってみたい！」意欲や、新しい知識との出会いから、遊びが深まり、思考力が育まれる。保護者も見てくださり、子どもの発見や気づき、園での笑顔に触れていただくことは、園と家庭のコミュニケーション、安心感にもつながると感じている。



(関連事例P.28：南陽市立赤湯幼稚園)

園から家庭、そして園へ

子どもたちの園での様子をHPなどで積極的に発信すると共に、植物や生き物の成長過程は、保護者も見ることができる場に展示してきた。それをきっかけに、家庭での会話が増えた。子どもが発見や気づきを発表する機会をつくったこともきっかけとなり、保護者と登降園時に花や昆虫を一緒に探す姿が増えた。保護者も自分から発信したことが子どもたちの興味につながり、園の保育への参加意識が高まった。子どもたちが分からないことを家庭で調べてきてくれたり、保育者が初めて体験するバケツ稲の育て方を祖父に聞いて教えてくれたりなどと、様々なバックアップを得ることができた。

(関連事例P.22：姫路市立中寺幼稚園)



経過を知らせる
掲示

